檸檬 れもん

梶井基次郎 かじいもとじろう

せいたん ねん むか かじいもとじろう
生誕120年を迎えた梶井基次郎は、1901（明治
ねん がつ おおさか う きょうと だいさん
34）年2月、大阪に生まれました。京都の第三
こうとうがっこう ぶんがく けいとう とうだいえいぶんか にゅうがく
高等学校で文学に傾倒し、東大英文科に入学します。
わか はい わずら
若くして肺を患い、1932（昭和7）年に31歳で亡
くなりました。

こうはんぶぶん と あ
ここでは後半部分を取り上げます。

【檸檬】

ひわたし みせ かいもの
その日私はいつになくその店で買物をした。という
めずり れもん で
のはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。檸檬など
ごくありふれている。がその店というのも見すばらしく
やおや す
はないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかった
ので、それまであまり見かけたことはなかった。いった
えのぐ
い私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチュー
しほ だ かた たんじゆん いろ
ブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それ

からあの丈の詰まった紡錘形の恰好も。——結局私
 はそれを一つだけ買うことにした。(中略)

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。その
 頃は肺尖を悪くしていていつも身体に熱が出た。

事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握
 り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも
 熱かった。その熱い故だったのだろう、握っている掌
 から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快い
 ものだった。(中略)

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りか
 な気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した
 詩人のことなど思い浮かべては歩いていた。汚れた
 手拭の上へ載せてみたりマントの上へあてがってみた
 りして色の反映を量ったり、またこんなことを思っ
 たり、

——つまりはこの重さなんだな。——

その重さこそつねづね尋ねあぐんでいたもので、疑
 いもなくこの重さはすべての善いものすべての美しい
 ものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあ
 がった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えてみた
 り——なにがさて私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは
 丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がそ
 の時の私にはやすやすと入れるように思えた。

「今日は一つ入ってみてやろう」そして私はずかずか入
 って行った。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた
 幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壘にも
 煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱が
 立て罩て来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思
 った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たい
 のを取り出すのさえ常に増して力が要るな！と思っ

た。しかし私は一冊いっさつずつ抜き出してはみる、そして開あけてはみるのだが、克明こくめいにはぐってゆく気持きもちはさらに湧わいて来こない。しかも呪のろわれたことにはまた次の一冊つぎを引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度いちどバラバラとやってみなくては気が済きまないのだ。それ以上いじょうは堪たまらなくなつてそこへ置いてしまおう。以前の位置いぜん いち もどへ戻かえすことさえできない。私は幾度いくどもそれを繰くり返かえした。とうとうおしまいには日頃ひごろから大好きだいすだったアングルの橙だいだい色の重おもい本ほんまでなおいっそうの堪たえがたさのためたに置いてしまつた。——なんとのろう呪のろわれたことだ。手ての筋肉きんにくに疲労ひろうが残のこっている。私は憂鬱ゆううつになつてしまつて、自分じぶんが抜ひいたまま積つみ重かさねた本の群むれを眺ながめていた。

以前いぜんにはあんなに私わたしをひきつけた画本がほんがどうしたこのちとだろう。一枚一枚いちまいいちまいに眼めを晒さらし終おつて後のち、さてあまりに尋常じんじょうな周囲しゅういを見廻みまわすときのあの変へんにそぐわないきもち気持きもちを、私は以前このには好あんで味あじわつていたものであつた。

……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰って来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌ただしく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去ったりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やっとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こった。その奇妙なくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、なに喰わぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行った。

変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑えませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も粉ばみじんだらう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。

【参考テキスト】

- ・「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp/>
- ・『梶井基次郎 ちくま日本文学208』（筑摩書房）